

キリシタン版にみる中世日本語の漢字と和訓の常用性

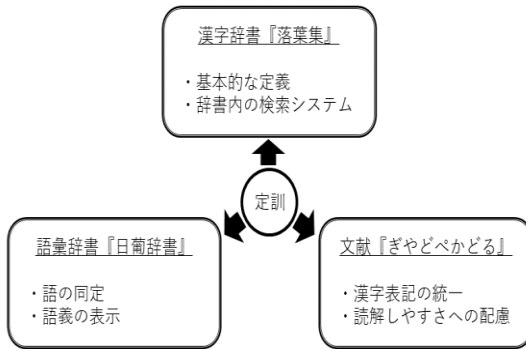
白井純

キリシタン版『落葉集』には各漢字に優先的に結びつく和訓（＝定訓）があり、その漢字と読みとの関係が、直後に刊行された宗教文献『ぎやどべかどる』や語彙辞書『日葡辞書』とも共通し、漢字整理に基づく表記と訓読みの安定につながったとされる。

本発表は、山田俊雄（1971）「漢字の定訓についての試論—キリシタン版落葉集小玉篇を資料にして—」（『成城国文学論集』4）、豊島正之（2002）「キリシタン文献の漢字整理について」（『国語と国文学』79-11）などの先行研究を整理し、漢字と和訓の常用性に基づくキリシタン版国字本の表記を検証したうえで、辞書と文献用例を比較し定訓について以下を主張する。



リオ本『日葡辞書』



定訓を用いたキリシタン版の漢字表記

1. 各漢字に複数の定訓が結びつき得るモデルを想定すべきこと
2. 漢字→和訓，和語（和訓）→漢字の関係の双方向でおおむね定訓に従った読解と表記を認めるが，和語→漢字の関係では，定訓に従う複数の漢字表記間にも優先性が存在し固定表記に更に接近すること
3. 『ぎやどべかどる』は『落葉集』に準拠することで表記の体系的性を考慮した漢字表記と和訓の整理を行った可能性がある。